

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

2012 年度第 1 回研究会報告書

東アジア・東南アジア大陸における文化圏の形成と他文化圏との接触—タイ文化圏を中心として—

平成 24 年度第 1 回研究会

日時： 2012 年 4 月 14 日（土）午後 1 時 00 分から 6 時 30 分

場所： 東京外国語大学 AA 研棟マルチメディア会議室（304）

報告：

1. 共同研究員全員  
「成果論文集について」
2. 富田愛佳（京都大学院生）  
「タイ・ルー語景洪方言の 2 音節連続における変調」
3. 新谷忠彦（AA 研元所員）  
「言語から見たカレン系民族の歴史」

## 報告の要旨

チベットや中国南部を通過して東南アジア大陸部に遷移した民族が多いが、カレン系民族は南下してきたのか、あるいはもともとタイ文化圏の先住民族であったのかは不明とされています。この度の研究会では、タイ文化圏の諸言語にみられる南北の影響を検討にする作業の一環として、移動経路が分からないカレン系言語と華南から遷移してきたタイ系言語とを取り上げた。中国雲南省シップソンパンナーのタイ・ル語については、また言語学の視点からカレン系民族の歴史については、富田愛佳氏と新谷忠彦氏にそれぞれ発表して頂いた。（唐立）

### 1. 「成果出版物について」

主査のダニエルスから、今年のプロジェクト出版物計画について説明があった。また、2011 年 3 月で終了しました、旧共同研究プロジェクト「タイ文化圏における山地民の歴史的研究」の成果論文集刊行について事務的な話をしました。（唐立）

### 2. 「タイ・ルー語景洪方言の 2 音節連続における変調」

タイ・ルー語景洪方言は南西タイ諸語の 1 つで、 /55, , 41, 13, 11, 24, 33/ とい

う 6 種の声調音素を持つ。タイ・ルー語の tone sandhi (連声) に関する先行研究は、Li (1964), 傅他 (1956), Weroha (1975), 巫、張 (1981) などがあるが、24 調, 41 調で連声が起こるという点で一致するほかは変化の内容もその環境にも先行研究間で整合せず、記述は錯綜している。本発表は、研究のこのような現状を踏まえ、発表者自身のデータのうち比較的例の多い 2 音節連続の音形を材料として変調の内容と環境をまとめた。なおここで変調と呼んでいるのは、音韻論的な声調変化を指す連声ではなく、あくまで音声的に調値が変化していることを指している。

調査方法は次のとおりである。使用する音声形式は 2006 年 8 月に中国雲南省西双版纳傣族自治州景洪市において 40 代女性母語話者の協力を得て収集・録音した語彙で、収集語彙項目の選定は『アジア・アフリカ言語調査票 上』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編, 1967) を基に適宜必要項目を追加した約 1300 項目(単音節, 3 音節以上の形式を含む)。また当該形式に対して想定される変調前の音韻形式としては、便宜上《傣仿汉语词典》(喻翠容、罗美珍編, 2004) の辞書形式を使用した。調査は 2006 年分の録音から 2 音節のものを中心に聞き直して音声形式を確認し、語または形態素の調類(声調音素) から期待される調値とどのように異なるかを調類ごとに例を集めて観察した。これにより確認できた変調とその環境は以下 (1) のようにまとめることができる。

(1) 変調の内容と環境

- a. /55/ : 第 1, 第 2 音節にかかわらず基本的に変調せず、単音節で現れる自由変異(平音節 [45~55], 促音節 [44-55]) があるのみ。
- b. /41/ : 第 1 音節では変調せず、第 2 音節では次のように変調する。  
/41/ → [51] / /55, 13, 24/ \_\_\_\_\_
- c. /13/ : 第 1 音節で次のように変調する。  
/13/ → [11~22] / # \_\_\_\_\_ . σ 第 2 音節では変調しない。
- d. /11/ : 次のように変調する傾向にある。  
/11/ → [31, 41] / /24, 55/ \_\_\_\_\_  
上昇調に転じる例も 1 つある。  
→ [24] / \_\_\_\_\_ /35/ (促音節)
- e. /24/ : /13/, /24/ の後では [35] が出やすく、/55/, /11/ の後では [13~24] が出やすいか。  
また、次のような例も 1 例ずつある。  
/24/ (促音節) → [55] / /35/ \_\_\_\_\_  
→ [33] / \_\_\_\_\_ /55/
- f. /33/ : 例が十分ではないが、傾向としては以下のように変調する。  
/33/ → [44, 55] / \_\_\_\_\_ /55, 11/  
/ /35/ \_\_\_\_\_

先行研究と (1) を対照させると、類似した結果となったのは、24 調が 55, 11 調の後で低

昇調 になる (1e) という部分で、これは Li (1964) の記述と部分的に重なる。また 41 調が 55, 13, 24 の後で 51 に変化するのは巫、張 (1981) の記述とも重なる。逆に異なる結果となったのは、次のような点であった。例えば (1c) で言及した 13 調の低平調への変調は、先行研究では指摘されていない。さらに 41, 24, 55 調で起こるとされていた変調のうち、55 調に関するものは確認されなかった。

今後は、発音速度によって変調に差が生じないかの確認や、辞書に頼らない音韻形式の同定、音韻的な声調変化という意味での連声と見なしうるものがあるかの検証などが主な課題である。(富田愛佳)

### 3. 「言語から見たカレン系民族の歴史」

カレン系民族は、この地域の多くの民族とは異なり、中国領内に言語系統が近い民族はいない。このことから、カレン系民族が現在の居住地に相当古くから居住していたと考えられる一方、チベットビルマ系言語の中で、どの言語がカレン語により近いのか、探索することには大きな意味がある。また、周辺言語との関係を考察することによって、よくわかっていないカレン系民族の歴史についても何らかのヒントが得られる可能性がある。

タイ文化圏を全体的に眺めてみると、その中で大河と民族分布の関連性を指摘できる。東から紅河、メコン河、サルウィン河、イラワジ河の四つの大河が存在しているが、タイ系民族は流れのある川のそばにしかすまない一方、モンクメール系民族、中でも歴史的に大きな政治権力を築き上げた民族はよどんだ水、ないしは灌漑によって貯めた水のそばを好む傾向が見て取れる。こうした傾向は地名をみることによって大方理解できる。また、タイ系民族の舞台がメコン河およびサルウィン河沿いであったのに対して、チベットビルマ系民族の舞台は、ロロ系民族を除き、イラワジ河沿い、それも中流域であった。

現在の言語および民族の地理的な分布状況を考えると、ある時期、ビルマ系民族はイラワジ河を南下して中流域に展開したが、一部は南下せずに上流域に留まり、それが現在のマル語、ラシ語、アツツイ語などであると考えられる。ビルマ系民族の南下以前に、同じようなチベットビルマ系民族の南下があったと考えられる。その時南下したのが現在のカレン系民族（ピューを含む可能性がある）であり、上流域に残ったのが現在のラワン系民族であると考えられる。ビルマ族の南下によってカレン系民族はイラワジ河中流域を追い出され、さらに南のデルタ地帯及び東西に移動したと考えることができる。

シャン社会は異民族を社会組織の中に組み込んだ社会で、シャン語はピジン語的である。同じように、カチン社会はイラワジ上流域に残ったさまざまな民族を東ねたりトル・シャンのような社会であり、ジンポー語もピジン語ではないかと考えられる。(新谷忠彦)

各発表に対して活発な質疑応答がありました。(唐立)